

2024年10月6日 説教「ローマに到着」

使徒の働き 28章 11～16節

良い港を出た後、さまよった船はマルタ島に漂着。276人全員が無事でした。その島の人々からの温かい援助を受けました。焚火にくべた柴から出てきたまむしにかまれたパウロは、命が守られ島の人々は感嘆しました。パウロは首長ポプリオの父の病気を主の御名でいやし、他の病人たちにもいやしのわざをなし喜ばれました。

1. マルタ島からイタリア半島に (11～13a 節)

①冬を過ごした後に(11)「三か月後に、私たちは、この島で冬を過ごしていた。船首にデオスクロイの飾りのある、アレキサンドリヤの船で出帆した。

わかりにくい文章ですが、要するに、マルタ島で冬の三か月間を過ごした後に、彼らはいよいよ出帆することになったのです。パウロやルカはもちろんのこと、百人隊長や前の船の船長たちも含めた者たちがその船に乗ったことでしょう。船はエジプトのアレキサンドリヤから来たもので、船首にはデオスクロイの像が刻まれていました。

②シラクサに三日(12)「シラクサに寄港して、三日間とどまり、」

船はシラクサに寄港しました。その港はイタリア半島の南にあるシチリア島(シシリー島)の南東にありました。シチリア島では重要な町でした。ここに三日間とどまりました。順風が来るのを待っていたからでした。

③レギオンに(13a)「そこから回って、レギオンに着いた。」

順風がきて、シラクサを船は出帆しました。そしていよいよ、イタリア半島に着きました。その南西にあるレギオンという町でした。ここはメッシナ海峡に入ろうとする港町で、多くの船はここに停泊して良い風を待っていたのでした。

2. 島 (13b～14 節)

①ポテリオに入港(13b)「一日たつと、南風が吹き始めたので、二日目にはポテオリに入港した。」

メッシナ海峡を通過していくのには、どうしても南からの風に乗らなければなりません。一日待って、ようやく南風が吹き、海峡を通り過ぎることができました。その後も順調であったようで、船は350キロほどの海路を進み、二日目にはイタリア半島の西側の港ポテオリに着きました。ローマに向かう人々は決まって、この港で下船しました。あとは陸路をローマまで行くことになるのです。

②七日間の滞在(14a)「ここで、私たちは兄弟たちに会い、勧められるままに彼らのところに七日間滞在した。」

イタリアのポテオリにクリスチャンがいました。福音はパウロのマケドニヤ伝道などを通して救われた人がイタリアに渡って伝えられていたの

でしょう。そして、そこにいるクリスチャンについての情報がパウロたちに届き、百人隊長の許可も得て、出会うことができたのでしょう。彼らは喜んで迎えてくれ、彼らのところに七日間滞在することができたのでした。どこにあってもキリスト信仰は融和をもたらしました。

③ローマに到着 (14 b) 「こうして、私たちはローマに到着した。」

ポテオリからローマまでは陸路。おそらく、ポテオリまでは 276 人のうちの多くは一緒だったでしょう。しかし、ポテオリの地でそれぞれの行動は別になったと思われます。とはいえ、少なくともパウロや囚人たちは、百人隊長のもと、連行され、約 180 キロの行程、彼らは徒歩あるいは馬に乗って、アッピア街道を進み、ついにローマに到着したのです。

3. 島の人々への癒しの働き (15～16 節)

①クリスチャンの出迎え (15a) 「私たちのことを聞いた兄弟たちは、ローマからアピオ・ポロとトレス・タベルネまで出迎えに来てくれた。」

15 節はローマに着く直前にあったことを伝えているのです。つまり、ローマにパウロ達が向かっていることをポテオリのクリスチャンたちが、伝えたのでしょう。それを知ったローマのクリスチャンたちが、アピオ・ポロ (ローマから 70 キロ) とドレス・タベルネ (ローマから 50 キロ) まで出迎えに来てくれたのです。パウロのことはローマのクリスチャンにも知られていたことがわかります。

②勇気づけられ (15 b) 「パウロは彼らに会って、神に感謝し、勇気づけられた。」

アピオ・ポロやドレス・タベルネで出迎えてくれた兄弟たちに会って、パウロは神に感謝をささげました。これまでの苦難や試練を越え、ローマは目の前であることを確認し、万感こみあげるものがあってでしょう。またこうした中に、主の具体的なお働きを感じ、勇気づけられたのです。改めて力が漲ってきたことと思います。

③自分だけの家に (16) 「私たちがローマに入ると、パウロは番兵付きで自分だけの家に住むことが許された。」

ローマに入ってから、パウロは守られていました。なにしろ、自分だけの家に住むことが許されたのです。囚人とはいえ特別待遇といって良いかもしれません。それも、番兵付きであることは、不自由という面もありますが、彼に悪意を持つ者たちから守られていたともいえます。

《結論》

パウロは三回の世界伝道旅行をするどこにおいても、ユダヤ人たちからの攻撃を受け、難しい局面がありました。そして、どんな時にも主なる神はそれ乗り越えさせてくださいました。彼自身の証しによれば、牢に入れられたこと、むちを打たれたことは数えきれず、石で打たれたこと、難船、川の難、盗賊の難、荒野の難、飢え渴き… (Ⅱコリント 11:23 以下)。実際死に直面したことも何度もあったとも言います。彼の信仰で驚かされるのは、「もしどうしても誇る必要があるなら、私は自分の弱さを誇ります」(同 11:30) と伝えている点です。困難な時に、自分の力で乗り切ろうとするのではなく、徹底して主に頼って歩んでいたということです。

そんなパウロは、三回伝道旅行も残すところわずかとなった時、御霊なる神の促して、マケドニアとアカヤを通った後、エルサレムに行くことにしたのです。それは困難の中に飛び込んでいくようなものでした。ところが、彼にはビジョンが与えられていたのです。それは『私は行ってから、ローマも見なければならぬ』というものでした (使徒 19:21)。そして、エルサレムにおいて、千人隊長のもと祭司長たちと全議会が召集された時に、パウロは議会で証と弁論をし、激しい論争となりました。その晩のこと、主はパウロに語りかけられたのです。『勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならぬ。』(使徒 23:11)。しかし、その後もパウロを殺そうとする動きは続きました。千人隊長の指導により守られてカイザリヤに行き、そこから、船でローマに向かうことになりました。ところが、船は難破し、ようやくたどり着いたクレテ島の良い港から出帆するに至っては、漂流してマルタまで運ばれ、ようやくにして上陸できましたが、まむしに噛まれてしまいました。しかし守られました。そんなこんなを経て、今朝の記事において、パウロと一行はようやくにして、ローマに到着したのです！ここに、御霊の促しや主の語りかけが真実で、それが成就したのです。

先主日の祈りのなかで、渡邊兄が「祈りがなかなか答えられないと思うことがあります」と伝えられていました。実際のところ、そのように思う向きは誰しもあることでしょう。そんなとき、パウロもここに来るまで、何回となく道が閉ざされるような場面があったことを覚えましょう。かつて、ヒュー・ハリスという宣教師がこのようなことを証しておられました。「20 年間、祈り続けてきた方が、最近、救われました。祈りは諦めずに続けていくことが大切です。」と。ある方が「お医者さんから、この病気は治らないと言われました。どうしたら良いのでしょうか」。確かに、医学的見地からはそれは真実ありましよう。しかし、それでも癒されると信じて祈り続けるとは、決して無分別ではありません。なにしろ、いのちを授けてくださったのは主であるからです。「求めなさい。そうすれば与えられます」(マタイ 7:7) の「求めなさい」は「求めている」(原語の未完形) という意味です。私たちも、パウロの粘り強い信仰、主のお約束を忘れない信仰を真似して、主を仰ぎ続け、求め続けていこうではありませんか。